

奈良
国立博物館
だより

平成8年 10・11・12月



第48回正倉院展

10月26日(土)～11月11日(月) 新館

会期中無休

午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

ただし金曜日は午後8時まで開館
(入館は午後7時30分まで)

平常展 「仏教美術の名品」

かすがまんだら

特集展示 「春日曼荼羅」

12月3日(火)～12月25日(水) 新館

月曜日休館

午前9時～午後4時30分

(入館は午後4時まで)

12月17日(火) 無料観覧日

〔写真解説〕

しだんもく がそうの びわ
紫檀木画槽 琵琶(正倉院 南倉)

全長98.7cm 最大幅41.7cm

4絃の琵琶。背面〈写真〉には、象牙・緑染めの角・檳榔樹・黄楊木・紫檀などをはめ込む木画の手法により、花枝をくわえた愛らしい小鳥や花を表わし、表側の撥受けには、騎獣・宴飲・奏楽の場面を緑青・群青・朱などの顔料を用いて細密に描いている。4絃琵琶はペルシャ地方を起源とする楽器で、中国からわが国にもたらされた。

第48回 正倉院展

10月26日(土)～11月11日(月) 新館

今年も「正倉院展」の季節となりました。今回は、数多くの正倉院宝物のなかから、献物帳とその記載品、調度品、楽器、染織品、衣服、仏具、文房具、古文書、経典など、広い分野にわたる70件(17件が初公開)が公開されます。

このうち献物帳は、光明皇后が屏風や花氈などを東大寺に追納した時の目録「屏風花氈等帳」(写真)で、藤原仲麻呂など関係者の署名もみられます。ここに記された宝物のうち、銀薰爐(香炉)・繡線鞋(くつ)・青斑鎮石があわせて出陳されるのが特筆されます。調度品には、華やかな錦で包まれた聖武天皇ゆかりの長班錦御軸(ひじかけ)、全面に瑪瑙を貼って螺鈿で文様を表わした美しい瑪瑙螺鈿八角箱(写真)、背面を螺鈿で飾った平螺鈿背八花鏡などがあります。

今回の展観では、楽器がまとめて出陳されるのが特色のひとつです。このうち紫檀木画槽琵琶は、木画の技法を用いて背面に愛らしい鳥や花を表わし、表側の撥受けに騎獣・宴飲・奏楽の場面を描いた名品です。螺鈿紫檀阮咸は、瓔珞をくわえた2羽の鸚鵡を背面に螺鈿で華麗に表わしており、正倉院に伝わる古代の代表的楽器として名高いものです。また、古文書では、戸籍・計帳・正税帳など、奈良時代の社会を知るために欠かせない公文書のほか、東大寺の大仏開眼会に参集した僧侶の名簿が初めて公開されるのが注目されます。

今年もまた、天平文化の粹を伝えるさまざまな正倉院宝物をぜひご覧ください。

特集展示「春日曼荼羅」

12月3日(金)～25日(水) 新館

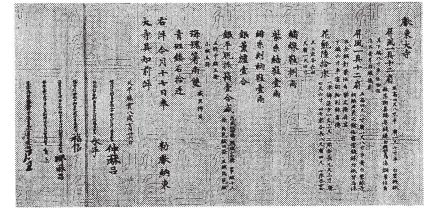
毎年12月17日には、平安末期からの奈良の古い祭礼の一つである春日若宮おん祭が催されます。若宮(若宮社の祭神)は午前0時に春日大社近くの若宮社を出て春日野にある御旅所の仮屋に移り、一日とどまります。おん祭はこの若宮にさまざまな芸能が奉納されることでも知られ、多くの人々がこれを見に集まります。

当館の12月の陳列では、毎年このおん祭にちなんで春日曼荼羅の特集展示をおこなっています。この春日曼荼羅も平安末期には成立していて、以降中世を通じて盛んに描かれました。春日社とその神域のみを描いた春日宮曼荼羅をはじめ、常陸鹿島社から武甕槌命が春日山に影響したという説話に基づいた鹿島立神影図、興福寺や本地仏を描いた春日社寺曼荼羅、春日本述曼荼羅など、形式に変化が多く、それぞれに名作が知られています。

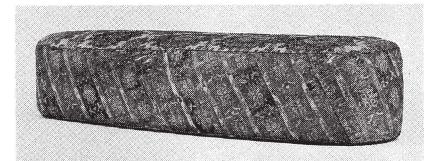
平常展「仏教美術の名品」

12月3日(金)～25日(水) 新館

当館では、わが国の仏教美術に関する多くの文化財を収蔵・保管しています。平常展ではそうした館蔵品・寄託品の中から、国宝・重要文化財を含む多数の仏教関係の優品を集めて、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各部門に分けて展示しています。



屏風花氈等帳



長班錦御軸



瑪瑙螺鈿八角箱



◎春日淨土曼荼羅(能満院)

主な展示品

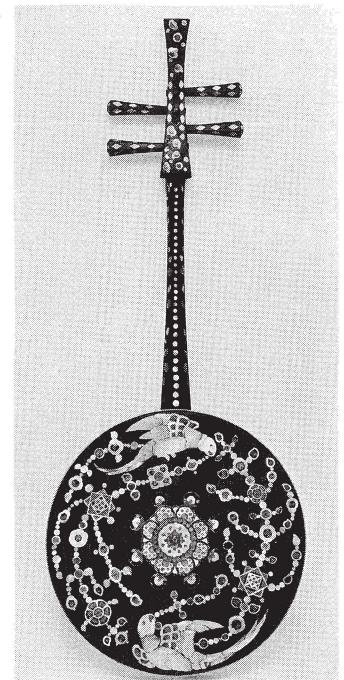
新館



銀薰爐

第48回 正倉院展

10月26日(土)～11月11日(月)
会期中無休



螺鈿紫檀阮咸

新館

七条織成樹皮色袈裟(織成の袈裟)、屏風花氈等帳(屏風や花氈などの献物帳)、*繡線鞋(刺繡のくつ)、銀薰爐(香炉)〈写真〉、*青斑鎮石、白石板子丑(大理石のレリーフ)、吹絵紙、*絵紙、緑牙撥鑑(撥鞘御刀子(小刀)、小三合水角鞘御刀子(三本組の小刀)、紫檀螺鑑(撥鞘銀盒)、刀子(小刀)、未造着軸(卷物の軸)、正倉院古文書正集第11巻(山背国愛宕郡出雲郷雲上里計帳)、正倉院古文書正集第21巻(下総国戸籍)、正倉院古文書正集第29巻(但馬国正税帳、因幡国戸籍)、*続修正倉院古文書第33巻(造仏所作物帳)、*正倉院塵芥文書第29巻(東大寺盧舎那仏開眼会供奉僧名帳)、*正倉院塵芥文書雜第1冊付:蠟燭文書(東大寺盧舎那仏開眼会供奉僧名帳)、続々修正倉院古文書第38帙第8巻(大神宮飾金物注文ほか)、檜八角方几(献物用の台)、檜八角長几(献物用の台)、*刻彫梧桐金銀絵花形合子(花形のふたもの)、密陀絵盆、蓮華残欠(仏前の供養具)、漆挾軾(ひじかけ)、長班錦御軾(錦貼りのひじかけ)、花鳥文染絶(文様染めの平絹)、*花鳥文彩絵白布(匂い袋の残片)、花葉彩絵絶(匂い袋の残片)、紫地文珠玉飾刺繡羅帶残欠(かぎり付きの帶状ぎれ)、赤布幡残欠(麻布製の幡)、灌頂幡身残片(幡の残片)、金銅鳳凰形裁文(鳳凰文様のかぎり)、金銅花形裁文(花文様のかぎり)、*金銅鎮鑼、*金銅水鳥形裁文(水鳥形のかぎり)、*金銅鳳凰形裁文(鳳凰形のかぎり)、金銅鶯鶯形裁文(オシドリ形のかぎり)、*金銅円形虎裁文(動物形のかぎり)、*金銅磬形裁文(唐草文様のかぎり)、平螺鈿背円鏡(螺鈿かぎりの鏡)、平螺鈿背八花鏡(螺鈿かぎりの鏡)、漆皮鏡箱、花鳥背八花鏡(花鳥文様の鏡)、黒漆鏡箱、瑠璃螺鈿八角箱(螺鈿かぎりの箱)、碧地金銀絵箱(献物用の箱)、粉地彩絵箱(献物用の箱)、貝匙、螺鈿紫檀阮咸(写真)、紫檀木画槽琵琶、竽、横笛、*漆鼓、*大般涅槃経集解卷第十二(唐経)、*法句譬喻経卷第一(光明皇后御願経)、大方广仏華嚴経卷第十七(称徳天皇勅願経)

(*は初出陳)

新館

平常展「仏教美術の名品」 12月3日(火)～25日(水)

〔彫刻〕

銅造觀音菩薩立像(当館)、○銅造藥師如來立像(般若寺)、○木造伎樂面(東大寺)、○銅造灌仏盤・誕生釈迦立像(東大寺)、木造大日如來坐像(元興寺町)、○木造阿彌陀如來坐像(安樂寿院)、○木造准胝觀音立像(常盤山文庫)、○木造聖觀音立像(本山寺)、○木造龍猛菩薩立像(泰雲院)、○木造明星菩薩立像(弘仁寺)〈写真〉、○木造增長天立像(法明寺)、木造毘沙門天立像(当館)、○木造增長天立像(称名寺)、○木造大將軍神像(大將軍八神社)、○銅造藏王權現立像(大峰山寺)、木造出山釈迦如來立像(当館)、○木造釈迦如來立像(当館)、木造阿彌陀三尊像(峰定寺)、○銅造阿彌陀三尊像(東京國立博物館)、木造阿彌陀如來立像、○木造彌勒菩薩坐像(藥師寺)、木造愛染明王坐像(当館)、木造十二神將像立像(当館)、○木造大黒天立像(興福寺)、木造大黒天立像(西大寺)、○木造化仏・飛天(興福寺)、銅造軍荼利明王立像(園城寺)、銅造釈迦如來立像(光明寺)

〔絵画〕



絹本著色春日曼荼羅(南市町)、絹本著色春日興福寺曼荼羅、絹本著色鹿島立神影図(当館)、○絹本著色春日本述曼荼羅(宝山寺)、○絹本著色春日淨土曼荼羅(能満院)

○絹本著色釈迦三尊像(總持寺)、○絹本著色阿彌陀如來像(西教寺)、○絹本著色如意輪觀音像(宝嚴寺)、○絹本著色十一面觀音像(金心寺)、○絹本著色不空羈索觀音像(一乘寺)、○絹本著色十一面觀音像(太山寺)、○絹本著色一遍聖絵(歡喜光寺・清淨光寺)〈写真〉、○絹本著色両界曼荼羅(金剛界)(子島寺)、○絹本著色愛染明王像(宝山寺)、○絹本著色五大尊像(觀音寺)

〔書跡〕

○僧綱補任(興福寺)、春日權現講式(高山寺)、○弥勒講式(笠置寺)、○地藏講式(笠置寺)、大般若經(施福寺)〈写真〉、大般若經(談山神社)、○紫紙金字法華經(乘宝寺)、大般若經(当館)

〔工芸〕

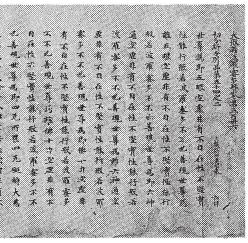
百万塔及び陀羅尼(当館)、銅錢弘倣八万四千塔(当館)、金銅寶篋印塔(当館)、金銅宝塔形舍利容器(当館)、金銅蓮台形舍利容器(当館)、○金銅火炎宝珠形舍利容器(海龍王寺)、○金銅透彫舍利容器及内容器(西大寺)、○鉄宝塔(西大寺)、木製宝塔(当館)、○黒漆密觀寶珠嵌装舍利厨子(般若寺)、春日神鹿舍利厨子(当館)〈写真〉、刺繡阿彌陀三尊來迎図(当館)、散蓮華蝶文螺鈿卓(当館)、○金銅宝相華文線刻如意(当館)、金銅柄香炉(高山寺)、金銅塔銘形合子、○銅草花文磬(峰定寺)、黒漆磬架(当館)、○金銅蓮華形磬(赤松院)、○金銅錫杖頭、金銅錫杖頭(当館)、金銅錫杖頭(施無畏寺)、○金銅迦陵頻伽文華鬘(中尊寺金色院)、○金銅尾長鳥文透彫華鬘(細見美術財団)、○木製蓮華文彩色華鬘(靈山寺)、○金銅蓮華文透彫華鬘(神照寺)、金銅輪宝揭磨文透彫幡、○金銅宝相華文透彫華籠(神照寺)、○紙胎彩色花籠(万徳寺)、竹製花籠(性海寺)、金銅裝蓮華化生文說相箱、○黒漆蒔絵戒体箱(万徳寺)、○金銅宝相華文透彫經筒(万徳寺)、黒漆唐草文螺鈿經箱、○黒漆孔雀文沈金經箱(淨土寺)、金銅三鈷杵(当館)、○金銅密教法具(巖島神社)、○金銅獨鈷杵(当館)、金銅三鈷杵、金銅五鈷杵(当館)、○銅鏡(円福寺)、○金銅獨鈷杵、○金銅三鈷杵、○金銅寶珠鈴、金銅五鈷杵(当館)、金銅宝塔鈴(当館)、○金銅五鈷四天王鈴(弥谷寺)、金銅種子五鈷杵(当館)、○金銅五鈷三昧耶鈴(金嶺山寺)、金銅揭磨(当館)、金銅輪宝(当館)、金銅金鉢(当館)、金銅四懸(当館)、銅鷲口(長谷寺)、○銅梵鐘(当館)、○十二尊鏡像(細見美術財団)、○阿彌陀如來鏡像(当館)、藏王權現鏡像(当館)、○山王十社懸仏(当館)、聖觀音懸仏(当館)、○春日神鹿御正体(細見美術財団)

〔考古〕

和歌山・粉河經塚遺物(銅經筒1口)〈写真〉、陶製外筒1口、紙本墨書法華經8巻のうち(当館)、伝近畿地方出土經塚遺物(銅經筒1口)、陶製外筒断片一括、紙本墨書無量義經一括のうち、菊花双鳥鏡1面、青白磁合子1合、太刀断片一括



木造明星菩薩立像(弘仁寺)



大般若經(施福寺)



和歌山・粉河經塚遺物(銅經筒)(当館)

12月26日(木)～1月3日(金)は全館休館となります。

○国宝、○重要文化財。展示品は都合により一部変更する場合があります。

1. 森鷗外と正倉院

森鷗外が奈良国立博物館や正倉院と深い関係にあったことは、すでに「奈良国立博物館だより」17号で紹介されています。大正6年（1917）12月25日から大正11年（1922）7月9日に61歳で現職で亡くなるまで、鷗外は帝室博物館総長の職にありました。帝室博物館総長は、東京・奈良・京都の帝室博物館と正倉院事務などを統括する要職です。鷗外が亡くなった時、内田魯庵は「森鷗外君」と題する追悼文を『明星』大正11年8月号に発表しました。以下はその一部です。

† † † † †

鷗外が博物館総長の椅子に坐るや、世間には新館長が積弊を打破して大改革をするという風説があった。丁度その頃、或る處で鷗外に会った時、それとなく噂の真否を尋ねると、なかなかソンナわけには行かないよ、傍観者は直ぐ何でも改革出来るように思うが、責任の位置に坐って見ると物置一つだって歴史があるから容易に打壊す事は出来ない、改革に焦ったなら一日だって勤めていられるもんじゃないといった。

だが、鷗外時代になってから目に見えない改革が実現された。陳列換えは前総長時代からの予ての計画で、鷗外の発案ではなかったともい、刮目すべきほどの入換えでもなかったが、左に右く鷗外が就任すると即座に断行された。研究報告書は経費の都合上十分抱負が実現されなかつたが、とにかく鷗外時代となって博物館から報告書が発行されるようになったのは日本の博物館の一進歩である。鷗外は各国博物館の業績に深く潜思して、就任後一、二回落合つた偶然の咄ついでにも抱負の一端を洩らしていた。もし長くその椅子に坐していたら必ず新生面を拓く種々の胸算があつたろうと思う。正倉院の門戸を解放して民間篤志家の拝観を許されるようになったのもまた鷗外の尽力であった。この貴重な秘庫を民間奇特者に解放した一事だけでも鷗外のような学術的芸術的理論の深い官界の権勢者を失つたのは芸苑の恨事であった。

† † † † †

世にあまり知られていない森鷗外のもうひとつの姿を髣髴させる文章です。正倉院の宝庫内での宝物観覧を「民間篤志家」（研究者）に許可した（それまでは身分の高い者のみ）ことも紹介されています。明治13年（1880）、伊藤博文が宝庫に棚架を設けて宝物を陳列することを願い出て許可されました。その棚架は翌年に完成し、明治22年（1889）から毎年秋におこなわれる宝庫の定期曝涼の際に、一定資格者の参観が許されるようになりました。ただしこの「一定資格者」には研究者は含まれていませんでした。すべての人々に宝物が公開される、現在のような正倉院展に至るまでには、さらに長い道のりがあったわけですが、鷗外の改革は忘れることのできない画期的なものであったと言つてよいと思います。

2. 奈良国立博物館と正倉院

奈良国立博物館といえば正倉院展と言われるほど、奈良国立博物館と正倉院とは深いつながりがあります。正倉院展は昭和21年（1946）に始まりました。ではそれ以前は、両者はどのような関係にあったのでしょうか。

大正3年（1914）9月、奈良帝室博物館（現在の奈良国立博物館）に正倉院掛が置かれ、正倉院は奈良帝室博物館が管理することになりました。奈良帝室博物館の館長は正倉院掛長を兼務し、博物館の構内にある正倉院御物修理所では、正倉院の古裂の整理と聖語藏の経巻の修理がおこなわれました。そして大正14年（1925）には、奈良帝室博物館で初めて正倉院古裂の展観がおこなわれました。戦前の正倉院宝物の展覧会は、昭和15年（1940／紀元2600年）に東京帝室博物館で開催された特別展観が知られていますが、それ以前に奈良帝室博物館において、古裂だけではあります、正倉院宝物展が開かれていたのです。なお現在は、正倉院は宮内庁の所管となっています。

3. 正倉院宝物の調査

正倉院宝物の調査は、宮内庁正倉院事務所の方々や委嘱された研究者によって続けられており、その成果は順次「正倉院年報」に発表されています。それらの成果は毎年の正倉院展にも反映されているのですが、このことは意外に知られていません。今年の正倉院展で初公開される「東大寺盧舎那仏開眼会供奉僧名帳」も成果のひとつです。

これは天平勝宝4年（752）4月9日におこなわれた東大寺の大仏開眼会に参集した僧の名簿です。この開眼会には1万人の僧が参集したと言われていますが、その具体的な僧名は知られていませんでした。しかし最近、正倉院事務所の調査で、塵芥文書第29巻と塵芥文書雜帳第1～3冊、および蠟燭文書が開眼会に参集した僧の名簿であることが判明しました。蠟燭文書とは、巻物が湿気などのために巻かれたままの状態で固まったものをいいます。今年の正倉院展では、塵芥文書第29巻・塵芥文書雜帳第1冊・蠟燭文書13巻が展示されます。塵芥文書雜帳第1冊は、文書のたくさんの断片をジグソーパズルのように台紙に貼り合わせたもので、その断片の中には開眼会で導師を勤めた菩提の名前も見られます。右の写真に菩提の名前が見えますが、おわかりでしょうか。



正倉院展講座

10:30～12:00 「正倉院宝物の調査－出陳品を中心に－」

宮内庁正倉院事務所保存課調査室員 西川 明彦

13:00～14:30 「正倉院の楽器が記憶している古代アジアの音」

元国立劇場演出室長 木戸 敏郎

14:40～16:10 「シルクロードを飛んだ鳥たち－花喰鳥と含綏鳥－」

当館考古室長 井口 喜晴

日 時：10月31日(火)

会 場：奈良県立文化会館小ホール（奈良市登大路町6-2 ☎0742-23-8921）

定 員：300名・入場無料

申込方法：住所・氏名・年齢・電話番号を記入の上、往復ハガキでお申し込みください。

ハガキは、申込者1名につき1枚とします。

宛 先：〒630 奈良市登大路町50 奈良国立博物館 普及室

締 切 り：10月15日(火) 必着 応募者多数の場合は抽選となります。

ギャラリートーク

12月11日(火)「春日曼荼羅」

美術室長 梶谷 亮治

午後2時より、新館陳列室で開催。入館者は自由に聴講できます。

親と子の文化財教室

平成8年度〈鎌倉時代の歴史と美術〉 主催・当館 後援・奈良県教育委員会

10月12日(土)「さまざまな塔のかたち」

11月9日(土)「鎌倉時代の工芸品」

12月14日(土)「鎌倉時代の絵画」

〈対象〉 小学5・6年生、中学生および保護者等。

児童・生徒のみの参加及び定員に余裕のある場合は高校生の参加も可。

〈時間〉 午前10時から12時

〈場所〉 国際奈良学セミナーハウス

〈定員〉 50名（先着順）

〈参加費〉 無料

〈申込方法〉 往復はがき（または電話）で、住所・氏名・学校名・学年・

電話番号・同伴する保護者等の氏名・実施日を記入のうえ、

〒630 奈良市登大路町50 奈良国立博物館 親と子の文化財教室係

☎0742-22-7771までお申し込み下さい。



ホームページ開設のお知らせ

インターネットによるホームページを開設いたしました。

ぜひ一度、のぞいてみてください。

〈アドレス〉 <http://www.narahaku.go.jp/>



開館時間 午前9時より午後4時30分まで（入館は午後4時まで） 正倉院展は別掲

10月・11月の金曜日は午後8時まで（入館は午後7時30分まで）

休館日 月曜日（月曜日が祝日または振替休日の場合は開館し、翌火曜日が休館）

観覧料金 毎月第2・4土曜日は、小・中学生無料（正倉院展を除く）。

正倉院展		大人	高・大生	小・中生
一般	790	450	250	
団体	530	250	130	

平常展		大人	高・大生	小・中生
一般	400	130	70	
団体	200	70	40	

（団体は責任者が引率する20名様以上。）

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し返信用封筒（80円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館の普及室にお申し込み下さい。

〒630 奈良市登大路町50 電話0742-22-7771 FAX0742-26-7218 テレフォンサービス0742-22-3331 **奈良国立博物館**